

アウトリーチによる家族支援の意義について ～重度精神障害者を対象とする ACT-Jにおける実践報告～

○足立千啓¹⁾、上田昌広¹⁾、樺島沙織¹⁾、小宮幹晃¹⁾、田中幸子¹⁾、野々上武司¹⁾、原子英樹¹⁾、
増田和歌子¹⁾、佐竹直子²⁾、伊藤順一郎³⁾

1) 特定非営利活動法人 リカバリーサポートセンター ACTIPS 訪問看護ステーション ACT-J、

2) 国立国際医療センター 国府台病院、3) 国立精神・神経センター 精神保健研究所

【背景と目的】

わが国の精神保健福祉施策は、入院医療中心から地域生活中心へと移行しつつあり、一層の地域生活支援サービス体制の充実が求められている。50年代から脱施設化を勧めた欧米諸国では、包括型のケアマネジメントのプログラムとして、ACT(包括型地域生活支援プログラム)が普及してきた。既存の地域精神保健サービスからこぼれ落ちやすく、頻回な入院やホームレス状態に陥るなど、とくに重い精神障害をもつ人々を対象としたアウトリーチ型サービスである。2003年より国立精神・神経センター国府台地区において、日本初のACTが研究事業として開始され(ACT-J)、研究終了後の2008年4月以降は、訪問看護ステーションの機能を活用し民営での事業を継続している。地域で生活する精神障害者の多くが単身生活者である欧米諸国と比べ、日本における精神障害者の家族同居率は高い。精神障害をもつ当事者のもっとも身近な存在である家族が、当事者のケア提供者として大きな役割を果たす現状がある。このような背景から、わが国において家族支援は精神障害をもつ人々に対する地域生活支援プログラムにおいて不可欠な要素と言える。ACT-Jでも事業開始当初から家族支援は重要な要素として位置づけられている。現在ACT-Jの家族同居率は利用者のほぼ半数である。今後、日本でのACTの導入が広がるにあたり、家族支援の位置づけは重要な課題となる。家族は「ケア提供者」としての役割意識を強くもつ場合が多く、当事者と長い時間を共にする家族が何らかの負担を感じている場合も少なくない。ACT支援のゴールは当事者が疾患や障害を抱えていても、希望する価値ある人生

を地域生活で送ることである。当事者のリカバリーへの歩みが家族のリカバリーの歩みと連動し相互に作用しあうと、それぞれにとって意味のある変化を促進すると考えられる。つまり、当事者支援と家族支援は車の両輪のように切り離せないものである。家族支援では、家族の心理状態や歩みのプロセス段階に沿った支援を適切に提供できることで、家族の生活満足度の向上が図られると考えられる。ACTの家族支援には、家族に対する直接の支援(直接支援)、本人に対する支援を家族に代わって行う支援(間接支援)のほか、家族・本人・ACTの三者間での話し合い等がある。とくに、三者間での話し合いでは、家族と本人共に思いがかりながらも面と向かい話し合えないテーマが、ACTが中立性を保ち加わる中で話題に上ることも多い。継続的な三者の話し合いでは、合意点を探るプロセスを通して、家族間のコミュニケーションパターンを改めて考える機会に繋がる印象もある。本人と会話や行動を共にするACTの関わりの姿勢を「参考にしている」と話す家族もおり、家族にとってモデル役割を果たす場合もある。ACTが果たす役割への認識を支援者が深め、より効果的に家族支援に生かされることが望ましい。今回我々はACT-J利用者および家族の同意のもと、利用者支援と連動した家族支援の経過をまとめ症例発表する機会を得た。当日は、先行研究が少ないACTにおける家族支援・アウトリーチ型の家族支援の実践を報告したい。